

聖書箇所：コリントの信徒への手紙一 2章 1～5節

○パウロの論敵たち→この世は愚かであって自分たちだけが真の知恵と知識の所有者であると誇り。

- ・彼らの影響により、コリント教会の内部には様々な不和が生じていた。「わたしはパウロに」、「わたしはアポロに」、「わたしはケファに」、「わたしはキリストに」と、実際はパウロやアポロ、ペトロ、キリストのこと、またその思想などをきちんと正しく理解できてはいない、誤解、曲解しているのに、自分はこうした人々のこと、またその思想などに関わる知恵、知識を有していると誇りにして「自分たちが正しい。あなたたちが間違っている」と仲たがいでいたのである。
- ・こうした状況を前にして、パウロは1：18～25で、そうした人間の知恵や誇りがいかに小賢しく、虚しいものかを強調した。イエス・キリストの十字架という人智をはるかに超えた神様の知恵を前にしては、パウロの論敵たち、またコリント教会内部で裁き合っている人々の人間の知恵など本当に取るに足りないものであり、ましてそれを誇りにするなど、そして人々を裁いて仲たがいを生み出すなど言語道断であるとメッセージを送った。
- ・さらにパウロは、前回の聖書箇所(1：26～31)でコリント教会の人々に「兄弟たち」と呼びかけ、教会を形作った時のことを思い出させる。そもそもコリントの教会はその成立時、政治的・社会的に影響力を持った大物や上層階級の人たちはほとんどいなかった。神様は「世の無学な者」、「世の無力な者」、「世の無に等しい者」、「身分の卑しい者や見下げられている者」をあえて選ばれて教会を成立させたと言う。それはコリントにおける福音宣教によって、人の基準に基づく差別が乗り越えられるため、人の基準に基づく「無学な者」と「知恵ある者」との関係や、「無力な者」と「力ある者」との関係、「無に等しい者、身分の卑しい者や見下げられている者」と「地位のある者」との関係がひ

っくり返されるために他ならない。この神様の選を前に、人々は人間同士の基準から離れて、「神の前」に自らの卑しさを徹底的に知らされ、その誇りを打ち砕かれる。人間的な誇りはまったく否定される。そのため、パウロは「だれ一人、神の前で誇ることはないように」、「誇る者は主を誇れ」という呼びかけをし、そのように人々が謙虚になり、ただ栄光と賛美を神様に帰すところから教会内の不和を解消していくことを訴えた。

- ・パウロの牧会はこれだけにとどまらない。今回の聖書箇所(2:1~5)で、パウロはさらに自分がコリントで人々に最初に宣教した時の姿を思い起こさせる。自分は人間的に「優れた言葉や知恵」を用いなかったではないか。そんなものにより頼んだのではなく、ただ聖霊が自分を通して働き、コリントでの宣教を成功させ、神様の力を証明されたのだ。宣教は小賢しい人間の知恵でどうこうなるものではない。ただ聖霊の導きの下で豊かな働きが為されるのである。宣教の主体はあくまでも神様に他ならない。そのことを思えば、あなたたちが人間的な基準を誇りにしてお互いを裁き合うなど本当に愚かなことであることが分かるはずだと訴えるのである。

【注解】

○「兄弟たち、わたしもそちらに行ったとき、神の秘められた計画を宣べ伝えるのに優れた言葉や知恵を用いませんでした。」(2:1)

- ・今回の聖書箇所も「兄弟たち」という親しい呼びかけで始められる。
- ・「神の秘められた計画」＝「神の秘儀(⊕ミステーション)」

その内容は「十字架につけられたキリスト」

ここで「秘儀」と表現されているのは、これが人間の知恵によつては理解されえないからだろう。これを人間の「優れた言葉や知恵」によつて説明して伝えることは不可能である。聖霊の助けなしには福音は理解されない。

- ・それゆえ、パウロはコリントで宣教を開始した時、当時の雄弁家や哲学者のように「優

れた言葉や知恵」を用いることはしなかったと言う。

○「なぜなら、わたしはあなたがたの間で、イエス・キリスト、それも十字架につけられたキリスト以外、何も知るまいと心に決めていたからです。」(2節)

・このようにパウロはコリント宣教に際して、「イエス・キリスト、それも十字架につけられたキリスト以外」他の何もかも福音の中心として自分は受け入れないし、また人に伝えもしないと決心していた。

・パウロの宣教内容は常に一貫して「イエス・キリスト」である。ここで特に「それも十字架につけられたキリスト」と強調されているのは、パウロがこの手紙を書いている時点で、彼が宣べ伝えた福音の原点からずれ、十字架の事実を抜きにした、キリストを単なる知恵、霊とする人々がコリントの教会に現れ、他の人々にも影響を与えていたからに他ならない。

○「そちらに行ったとき、わたしは衰弱していて、恐れに取りつかれ、ひどく不安でした。」(3節)

・使徒言行録を読めば分かるように、パウロはフィリピさらにテサロニケと福音の宣教に成功した。しかしその成功ゆえにユダヤ人のシナゴグ(会堂)を中心にした社会の反発を受け、アッピヤ街道をイリリコンからローマへ、さらにスペインへと宣教していくという当初の計画を断念し、ベレアに夜逃げし、そこにもいられなくてアテネを経てコリントに辿り着いた。使徒言行録の記事から推察して、おそらく彼のアテネでの宣教は不成功であったと思われる。せっかくフィリピとテサロニケで福音宣教が成功したのに、それによって思わぬトラブルと計画の中断に見舞われ、さらにアテネで宣教に失敗することになったパウロは、コリントで思ってもみなかった協力者との出会いに恵まれ、宣教の成果が与えられて新しい意欲が生まれるまで、文字通り「衰弱していて、恐れに取りつかれ、ひどく不安で」あったのだろう。パウロはそのような打ちのめされた自分を通して福音宣教が思いを越えて進展したことを思い起こす。そして、その体験から4節

の確信を述べるのである。

- ・「わたしの言葉もわたしの宣教も、知恵にあふれた言葉によらず、“霊”と力の証明によるものでした。」(4節)

→パウロの宣教活動はその内容も方法も、この世の「知恵にあふれた」説得力のある「言葉」によるものでは決してなかった。そうではなく、それはただ聖霊とその御力によるものであった。パウロの宣教はひとえに聖霊とその御力を証明するものに他ならない。

- ・聖霊の御力と宣教の結びつきは、イエス様も預言されていたことで(cf. マタイによる福音書 10 : 20、ヨハネによる福音書 15 : 26~27)、パウロは使徒としての働きの根拠をここに置いていた。パウロはどの地方の教会形成においても、このことを深く自覚していたのである(cf. ローマの信徒への手紙 15 : 18~19、テサロニケの信徒への手紙一 1 : 5~6)。

- 「それは、あなたがたが人の知恵によってではなく、神の力によって信じるようになるためでした。」(5節)

→コリントの教会の人々の信仰は「人の知恵」によって生じたものではない。それはただ「神の力」によるものだった。そのことを思えば、人の知恵を誇りにしてお互いを裁き合うことなど愚かなことであり、明らかな間違いであることが分かるはずだとパウロはメッセージを送る。

【今回の聖書箇所から思うこと】

- 宣教の主体は神様であるということをきちんと押さえておきたい。教会で宣教を考える時には、まず聖霊の助けと導きを祈り求めるところから始めていきたいと思う。それらなしには、豊かな宣教を為していくことなどできない。そして、宣教の実りが与えられた時には自分たちの力を誇るのではなく、ただ神様を賛美し、神様に感謝を捧げていきたいと願う。